

マスターズを彩るレジェンドたち(25)

水無月の6月は11日が入梅、21日は昼が最も長いとされる夏至、23日はオリンピック・デーだ。本格的な暑さも増してくる。マスターズ陸上界も好記録が各地で生まれ、連合事務局に寄せられてくるだろう。今月は3月下旬、ポーランドで行われた世界マスターズ室内陸上で活躍した古希(70歳)の女性お二人にご登場願った。玉田ゆみ子さん(宮崎)と長崎ひな子さん(広島)だ。

写真／佐々木文夫さん、玉田ゆみ子さん

玉田ゆみ子さん・(70歳・宮崎)が、5種目に出場。金1、4位4種目

すごいスタミナだ。3月下旬のポーランド・トルン室内の世界陸上で4×200mの男女混合リレーを含め、3日間で5種目をこなした。W70・三段跳を皮切りに、五種競技、60mH、棒高跳、最後にリレーだ。その人は玉田ゆみ子さん。

成績は6月号に掲載してあるが、再記載するとW70・60mHの14秒42をはじめ、棒高跳1m50、三段跳6m71、五種競技1992点でいずれも判でついたように4種目ともに4位だった。2走を務めた最終リレーでは見事に金を射止めた。「体が自由に動くのかなー、と。でもメンバーに選ばれた限り、全力を出し切って走ろう」と必死でバトンを運んだ。

優勝した瞬間「ホッとしました。うれしさも倍増でした」と玉田さん。46歳から始めたマスターズ陸上。走る、跳ぶ、投げるの経験はない。高校は宮崎県立高鍋高。「陸上でハードルをやりたかったのですが、器械体操部に入り」活躍した。関西地区の大学へ進み、体操で鍛えられた。

このとき鍛えた体が中年になってマスターズ陸上をやるようになってから、役立っているのかもしれない。「陸上では若い頃やってみたくて思っていたハードルをはじめ、種目が多いからどの競技も」と、今回のトルン室内大会のように棒高跳、三段跳、立五段跳や五種競技などに挑んでいる。

主婦となり、4人の子育てが終わって「健康維持のために」と始めたのがマスターズ陸上だ。室内大会で海外へ遠征したのは今回で3回目。これより以前、46歳の1999年、宮崎マスターズ大会に出場したときはW45・100m16秒43(−0.8)と走幅跳3m66(+0.9)で2種目に勝った。

同じ年の11月に熊本での第20回記念国際・全日本マスターズ大会にもエントリーし、W45・80mHに出て16秒30(+1.3)で2位、走幅跳も3m73(+0.1)と距離を伸ばして2位と表彰状を手にした。この両種目は9月に佐賀であった全九州マスターズ大会でも勝っている。

時は流れ64歳となった2017年に韓国テグであった第7回世界マスターズ室内大会では、W60クラスで不利な年齢ではあったが、800m4分37秒99、60mH13秒36、棒高跳1m30、三段跳7m27、砲丸投5m26、五種競技1973点ほか、W45クラスの4×200mRに加わり、アンカーを務め、2分20秒27と7種目に室内日本記録を残した。

テグの後が今回のトルンでの室内大会で、5種目に出た玉田さんの記録はすべてW70クラスの創設記録といっている。「とにかく私たち日本人と外国人選手とでは体格が違うので、

そばに寄ると威圧感があって」と玉田さん。

室内以外の世界マスターズ大会には62歳の2015年、フランスのリヨン大会に参加して、W60・三段跳に7m55の8位。後はW40クラスの4×100m、4×400m両リレーに加わり、いずれも4走で7位と8位となり、W70クラスの8kmクロカンでは団体6位と入賞できた。

同年の岐阜で行われた第36回全日本マスターズ大会ではW60・走高跳1m03で1位、三段跳7m24の2位だった。年齢が上がって65歳での2018年、第23回世界マスターズ大会のW65・80mHは18秒70(−1.2)の5位。三段跳は6m81(−3.0)でトップ6へ、リレーではW50・4×100m(3走)で8位、W55・4×400m(2走)は7位となった。

「世界大会を含め、アジア大会、日本での大会とすべてが懐かしい」といい、「世界大会で仲良くなった外国の人と



国際大会で知り合った外国人選手と積極的に交流する玉田さん(左)

は、言葉が分からないのに文通したり」と笑いながら。なかでも国内大会の2014年に岩手であった第18回アジア大会を兼ねた第35回全日本マスターズ北上大会が「にぎやかで楽しかった」と。

北上での玉田さんは61歳。W60・80mHで17秒91(+0.1)の3位、棒高跳が1m60、三段跳は7m36(+0.2)の2位と、3種目ともディプロマを手にした。現在、週1回小学生を相手に陸上教室を開いているが「楽しく陸上」を目標に一緒にやっているが「むしろ、こちらが学ばせてもらうことも」。

10月に山口で行われる全日本マスターズ大会には参加予定で「どの種目にしようか、と迷っています」というが、目指す種目については「わずかでもいい、記録を上げていきたい」と口を結んだ。

長崎ひな子さん(70歳・広島)、 出場4種目で金1、4位3種目

3月下旬に行われたポーランドのトルン世界マスターズ室内大会に出た長崎ひな子さん。玉田ゆみ子さんと同じ70歳。こちらはW70・60m、200m、400m、男女4×200mRと短距離4種目に出て、金1、3種目で4位と玉田さんと似通った成績だった。

タイムの方は60m10秒28、200m36秒78、400m1分26秒64が4位の記録。混合リレーは3走を務めて2分20秒09の1位でゴール。このラストを締めくくるとリレーは長崎さんまで3番手と頑張り、アンカーの佐々木文夫さん(岩手)がトップへ躍り出たのだ。

長崎さんは「リレーのメンバーに加わったのは、現地に来て初めて耳にしました。びっくりでしたが、バトンパスを失敗しないようにと、腹をくくって。レースで佐々木さんがトップで入ったときは、感極まって。最後にいい夢を見させていただきました」と話す。

ほかの種目については「短い距離が

好きなので、60mから400mまで出ました」という3種目の記録については、いずれもマスターズの日本室内創設記録になりそうだ。

室内大会に出場したのは2017年のテグ(韓国)と今回のトルンの両大会で、テグでのときは64歳。同会場に出したW60・60m9秒82、200m34秒62はW60クラスの室内日本記録となっている。

長崎さんのマスターズ陸上歴は「50歳過ぎから」と奥手の年齢から。小学生の頃から「運動会るとき、選手になったことがない」そうで、陸上の経験はない。では、なぜマスターズ陸上を。それはトルンの男女4×200mRで1走だった新居田哲司さん(愛媛)から「どう、走ってみる?」と声を掛けられたのが、きっかけ。

長崎さんと新居田さんは顔なじみで、その誘いに乗った。長崎さんは57歳で2010年の広島マスターズ大会のW55・100mに出てみた。16秒01(±0.0)で1位に。翌年は100mで15秒38(+0.5)とタイムは上昇。200mも32秒96(+0.3)でトップだった。

また、中国マスターズ大会でもW55・60m9秒67(-1.3)、100m15秒79(-2.3)と2種目に勝った。翌2012年には岡山での第33回全日本マスターズ大会へ。W55・60m9秒61(+1.3)では5位、100m15秒95(-0.8)の7位、200m34秒23(+0.7)も7位だったが3種目とも入賞できた。59歳だった。

レースが面白くなってきて、63歳で出場した岐阜で行われた第36回全日本マスターズ大会では、W60・60m9秒81で表彰台に上げられる3位に。後の100mと200mは16秒07(+5.1)、34秒68(+1.3)で4、6位になり、表彰台は逃したものの、ディプロマを手にした。

65歳でW65クラスになって、マスターズ発祥の地、和歌山であった国際・第38回全日本マスターズ大会に参加

したときは、W65・100m16秒23(+1.4)の5位、200m34秒63(-0.7)で2位に躍進。和歌山大会のほぼ1カ月前に開かれた中国ルガオで開催された第20回アジア・マスターズ大会の100m、200mは16秒28(+0.3)、35秒43(+0.2)と2種目で2位の成績だった。

同じアジア・マスターズ大会でも、ルガオ大会の4年前に岩手・北上での第18回大会に参加したときは「さすがにアジア大会は大きくて、にぎやかだな」という印象だったとか。レースの方は61歳だったのでW60クラスの60m、200mで2、3位と上位へ。

長崎さんは広島市内に住み、月1回は広島マスターズが行っている練習会に参加するほか、週2回ほど尾道まで1時間40分かけて遠出して練習する熱心さ。また、「自分の勉強にもなるし、子どもたちと練習会(教室)を行っています」と。

専門的な知識がないままマスターズ陸上に参加、没頭している長崎さん。「生涯スポーツとしてケガしないように、元気で頑張ります」と張り切っている。10月に山口で予定されている全日本マスターズ大会にはエントリーするつもりだ。



トルンで金メダルを手にしたM70・男女4×200mRのメンバー。左から佐々木さん、長崎さん、玉田さん、新居田さん